Euro-NARASIA | SERIAL REPORT〈第十回〉

飛鳥・奈良と「汎ユーラシアのイラン文化」

青木健 Takeshi AOKI

13 キルギス・セミレチエ（七河地方）におけるゾロアスター教・マニ教遺跡（前篇）

『ユーロナラジア』第1号から第9号まで掲載して頂いた論考では、イラン高原のペルシア州を起点として、

ペルシア（イラン）・・・第1号、第2号、第3号、第4号
←
スィースターン（イラン）・・・第4号
←
ソグディアナ（タジキスタン、ウズベキスタン）・・・第5号、第6号、第7号
←
ホラズム（ウズベキスタン）・・・第8号、第9号

と、シルクロードをイランから「東へ、東へ」旅しつつ、各地域のゾロアスター教の特徴について論を進めてきた。奈良か長安を起点に「西へ、西へ」向かう東アジア中心のシルクロード観もあるが、宗教文化の流れから言えば、西アジアで儒教や道教が布教されたという現象は知られていないにも拘らず、東アジアではゾロアスター教、マニ教、ネストリウス派キリスト教、イスラームが広く宣布している。少なくとも、宗教文化を論じるに当たっては、西アジア・中央アジア中心の地理感覚が優先されるべきなのではないかと筆者は考えており、本稿はイランから奈良を目指すという構成になった。

次に問題となるのは、そのルート選択である。イラン高原上のシルクロードは、メソポタミア平原からアルボルズ山脈の南麓を通過してバクトリアを目指す「イラン北路」と、ペルシアから東進してスィースターンへ入り、そこから北上してバクトリアに向かう「イラン南路」に分岐している。このうち、「イラン北路」を通った場合、3～10世紀のゾロアスター教神官団の最大の本拠地であるペルシアを素通りしてしまうので、本稿では「イラン南路」に絞って論じてきた（地図1参照）。

今号では、ソグディアナから更に東進するに当たり、このシルクロードのルート選定が

再び問題になった。シルクロードは、現在の中国領新疆ウイグル自治区でも「天山北路」、「天山南路」、「南路」の３つに分岐する。ゾロアスター教研究上では、パミール高原がザラスシュトラの故地とされており、またタジキスタン共和国のゴルノ・バダフシャン自治州から中国領新疆ウイグル自治区のタシュクルガン・タジク自治県（蒲犁）にかけての一帯には、今でも東南イラン語を話すイラン系民族（パミール人と呼ばれる。西南イラン語のペルシア語を話すタジク人とは別）が住み着いている。中国電視台は２０１２年に、この付近で「２５００年前のゾロアスター教の葬送儀礼跡が発見された」と報告した（動画としては、http://english.cntv.cn/2014/08/12/VIDE1407843119676688.shtml参照）。これらを観察する為には、「天山南路」と「南路」に準じて、タジキスタン・中国国境上で、標高５０００メートル級のパミール高原を越えるのが望ましい。しかし、２０１６年夏の段階では、中国領内のタシュクルガンで調査をする見通しが立たず、この着想を放棄せざるを得なかった。

地図１：イラン北路とイラン南路、およびセミレチエの位置

その代わり、パミール高原を迂回し、ソグディアナから天山山脈の北部を目指す「天山北路」を試すことにした。現在の国名で言えば、ウズベキスタンからキルギス（中央アジア諸国で唯一、語尾にペルシア語の「～スタン」が付かない）へ抜けるルートである。この場合、焦点は、セミレチエ地方（キルギス北部からカザフスタン南部のイリ河周辺地域）の中のキルギス領内にある3つの遺跡―バラサグン遺跡、アク・ベシム遺跡、クラスナヤ・レーチカ遺跡―に絞られる。イリ川北部に当たるこの一帯では、シルクロード華やかなりし6～9世紀の頃、天山北路に沿って中国を目指すソグド人たちの植民都市が点在し、イラン系文化を伝えていたとされる。

❶ビシュケク（旧フルンゼ）市内・・・

2016年の8月～9月に、奈良県立橿原考古学研究所の調査隊に加えて頂き、ウズベキスタンからキルギスの首都ビシュケクを訪れた際は、道路の両端に整然とした白樺並木がどこまでも続き、トルコ系遊牧文化より濃厚にロシア文化を感じた。また、日本人とそっくりのキルギス人たちが、流暢なロシア語を操っているのには驚かされた。平均的なキルギス人は、「文化用語としてのロシア語」と「生活用語としてのキルギス語」のバイリンガルだそうで、ロシア語は決して外国語ではないとのこと。ここはもう天山山脈の北麓に当たり、西進を続ける中国文化と東進してきたロシア文化が交わる最前線なのである。黄色人種の顔立ちをした人々が、ロシア語を母語と認識する事態だってあり得るだろう。

本来ならば、ビシュケクでキルギス国立歴史博物館を訪問し、キルギスの考古学遺物を概観する予定だった。しかし、8月29日にウズベキスタンを出国する際には「カリモフ大統領が亡くなった」との噂が流れて政情が不安定になっており（9月2日に死去が公表された）、キルギスに入国した30日にはビシュケクの中国大使館で爆弾テロがあるなど、甚だ物騒である。特に、後者の犯行グループが中国政府に反対して新疆ウイグル自治区の独立を唱えるウイグル人武装勢力

地図２：現在のキルギス共和国

であった場合、中国人に見えなくもない日本人は標的にされる恐れがある。結局、8月31日のキルギス独立記念日の喧騒の中、我々は博物館の訪問を断念し、目立たぬように首都を離れて東を目指した。

❷バラサグン遺跡(Balasagun)・・・ビシュケク～バラサグン遺跡の国境線は入り組んでおり、幹線道路を走行しているにも拘らず、何度かカザフスタン共和国側に入り込む。カザフスタンの方がガソリンが安いそうで、運転手も好んでカザフスタン領内で給油していた。

途中のトクマクの街(地図2参照)では、中央広場に戦闘機のレプリカが展示してあった。ここは旧ソ連時代に空軍基地があった街で、戦闘機パイロットを養成していたそうである。旧東側陣営に属したエジプトのホスニー・ムバーラク大統領（1928年～）やシリアのハーフィズ・アサド大統領(1930年～2000年)は、空軍将校時代、このトクマクでパイロットとしての訓練を受けていたと聞いた。残念ながら、空軍基地はソ連崩壊後に撤去され、今では何も残っていないが。

ビシュケクから3時間ほどかけてバラサグンとされる遺跡に到着(写真1参照)。ここはチュー川が中央を流れる天山山脈北麓の盆地で、周囲は万年雪を頂いた山また山である。シルクロードの天山北路の中継地点に当たることから、7～9世紀頃にソグド人の隊商都市が造営されたのが街の始まりとされる。その後、遊牧民族の突厥人やウイグル人が王庭として幕舎を張ったことで、都市として発展したという。特に、トルコ系遊牧王朝カラ・ハン朝(10世紀～1212年)やカラ・キタイ朝（1124年～1218年）の首都だったのではないかと推定されている。これらの王朝は天山山脈北麓を王庭としたので、その可能性は高い。但し、文献上でこの街の存在が確認されるのは10世紀前半に

写真１：バラサグン遺跡遠景

写真２：バラサグン遺跡博物館

過ぎず、それ以前のバラサグンの歴史は不明である。

2部屋しかない附属博物館（写真2参照）に入ってみると、中央アジアのゾロアスター教徒に特有の納骨壺オスアリや、ネストリウス派キリスト教徒特有のシリア十字架墓が多数展示されていた。シルクロード華やかなりし頃には、ソグド人ゾロアスター教徒やネストリウス派キリスト教徒などが多数バラサグンに居住していたことが分かる。

ただ、問題なのは、それだけでは無い点である。数量の上では、ソグド人商人やシリア人商人が齎したとは到底考えられない遊牧民的意匠の方が多く、ペルシア、ソグディアナ、ホラズムで確認したような「ゾロアスター教考古学」とは懸け離れた世界が眼前に展開していた。例えば、バラサグン遺跡の墓石の一つ（写真3参照）をご覧頂きたい。このモチーフは、少なくともゾロアスター教の知識では解けない何かである。

サマルカンド、ブハーラーや（次号以降で扱う）トゥルファン、敦煌などは、遊牧文化との接壌地帯にあるとはいえ、基本はオアシス都市で、定住民や商業民が一定数は存在していた。しかし、天山北路に回り込んでセミレチエに出ると、このルート沿いの諸都市は遊牧民と商業民の交易都市といった趣きになり、遊牧文化の痕跡が飛躍的に増える。

写真３：バラサグン遺跡の墓石

更に、バラサグン遺跡の敷地内には、無数の石人像（トルコ系言語でBalbal）が林立していた（写真4参照）。北ユーラシアの草原地帯で、幾つかの石を平面に積んである構築物があった場合、それは遊牧民が泉下の遺体を動物に食べられないように工夫した「積み石塚」だそうで、大規模な「積み石塚」の下を掘れば、サカ族や烏孫族の族長クラスの遺体が発見される可能性が高いと聞く。しかし、これらの石人像は、「積み石塚」の発展形態として墓標の一種なのか、それとも全く別に、遊牧民が倒した敵を記念して建てた戦功碑なのか、判断する材料がない。まだ文字を持たない段階の遊牧民が、何らかの宗教的な感情を反映させて建てた構造物であるということだけが察せられた。

なお、ここにこれだけの量の石人が集約されているのは後代の作為であるが、石人がこの周辺に多いのは事実のようで、それらがソグド人ゾロアスター教のオスアリと並行して用いられている。オスアリ自体はソグディアナで見たものと一様だから、セミレチエのゾロアスター教の特徴は、濃厚な遊牧民文化の中に投げ込まれつつ（少なくとも葬送文化から見た場合）、それらの遊牧文化とあまり混淆せずに共存していた点にある。

そうだとしたら、逆にソグド人ゾロアスター教徒からトルコ系遊牧民へのゾロアス

ター教文化の伝播はなかったのであろうか。9世紀以降のトルコ系遊牧民のイスラーム改宗は、遊牧民のシャーマニズムとスーフィズムの類似性が一つの契機になったと説明されることが多いが、トルコ系遊牧民たちは、それ以前にゾロアスター教やマニ教の影響を蒙らなかったのであろうか。オスアリ内部の遺骨のDNA鑑定を行い、コーカソイド系のソグド人とモンゴロイド系のトルコ人を識別できないかというような研究手法が脳裏に閃いた。

7～9世紀のシルクロードに於けるソグド人ゾロアスター教文化と遊牧文化の関係に困惑しつつ、最後にバラサグン遺跡の目玉であるブラナ(Burana)の塔への登攀を試みた。これは、11世紀のカラ・ハン朝の時代に、高さ46メートルのミナレットとして建てられた塔らしいが、度重なる地震の影響で、今では24メートル分しか残っていない。塔の上に出てみると、360度周囲全てが天山山脈で、秋も迫るというのに草色が萌え、遊牧民が随喜の涙を流すであろう光景であった。ここが、満州の遼王朝の王子であった耶律大石(1087年～1143年)が、新興の金王朝に敗れた後、ここでグル・ハーンに即位して西遼＝カラ・キタイ朝を再興した伝説の土地である。

写真4：バラサグンの石人

❸アク・ベシム遺跡（Ak-Beshim）・・・

次に訪れたのは、ソグド人によって6世紀頃に造営され、6～9世紀に天山北路の中継地点として栄えた隊商都市アク・ベシム。但し、この都市が文献上に出現するのは、629年のことである。一時期は西突厥(582年～657年)の首都として栄え、

また679年以降は唐王朝の支配下に入り、「砕葉城」または「素水城」（スィアーブ＝原語はペルシア語のスーイェ・アーブと推測されている）と名付けられて、安西四鎮の1つに数えられていた（他の3つは亀茲、于闐、疏勒と、いずれも現在の中国領新疆ウイグル自治区内にあるが、砕葉だけは現在のキルギス領内に含まれる）。唐がここを放棄してからは、突騎施などの遊牧地方王朝の首都として存続し、10世紀にはバラサグンに経済的繁栄を奪われたらしい。

位置的には、アク・ベシムはバラサグンから北西へ6キロほどの地点にあり、両者の立地条件には殆ど変わりがない。何故、6キロの距離をアク・ベシム⇒バラサグンと「遷都」したのか、理由は分からない。城壁は750メートル×600メートルで、バラサグン遺跡より一回り小さい（写真5参照）。藤原京（694年）や平城京（710年）を100年近く遡る時代に造営されただけあって、同じく唐風文化の許に構想された都城ではあるものの、碁盤目状の土地区画はなされておらず、上空写真で見ると、ソグド期の城壁も、それ以降の内城も外城も、甚だ不規則な形状をしている。

ここでは、特にマニ教について紹介したい。砕葉鎮では、則天武后の時代に大雲寺が設置されたと伝わるのだが、これがマニ教寺院かどうかは研究者を頗る当惑させている。と言うのも、「大雲寺」と言う名称が一時期の中国摩尼教寺院に用いられていたのは事実であるものの、マニ教寺院専一の名称とは限らないのである。仮に「大雲寺＝マニ教寺院」と定義して、漢文資料から読み取れる「大雲寺」を機械的に地図上に落としていくと、中国内地の相当部分に「マニ教寺院」が出現し、マニ教が中国で大流行していたことになってしまう（そういう研究を、ドイツの学者が実際に行った）。このような結果は他のデータと齟齬があり、容易に納得し難いので、おそらく前提条件の方が間違っている。また、この文献上のデータの他に、旧ソ連の考古学者による発掘調査の結果、ソグド期の城壁の一角に、マニ教寺院も存在したとされている。果たしてそれが漢文文献上の大雲寺に該当する遺跡なのかを確かめたいと言うのが、ここを訪れた主な動機である。

写真5：アク・ベシム遺跡遠景

写真６：アク・ベシム遺跡のキリスト教教会跡

とりあえず、持参した資料を基に遺跡の内部を歩き回ったところ、少なくともバラサグンよりも漢化の痕跡が明瞭な都市遺構だとの印象を持った。１９９７年には、ここで漢文による軍勲碑文も発見されているそうで（現物はビシュケクの博物館にあって実見できなかったが）、相当数の漢民族（おそらく、軍人と商人）がこの地に駐留していたことは想像できた。この段階では、筆者は、都城内部の宗教施設の状況も、中国内地に準じて仏教寺院や道観が優勢なのではないかと考えていた。

しかし、ソグド期の城壁の東南角の好位置は、仏教寺院でも道観でも、それどころかゾロアスター教拝火神殿でさえなく、ネストリウス派キリスト教教会によって占められていた（写真６参照）。しかも、城内には２つも教会があり、放棄される直前の段階の砕葉城では、仏教やゾロアスター教を飛び越えて、ネストリウス派キリスト教が為政者から最も優遇されていたことが看取できた。これは少し衝撃的な事実だった。この地に居住していたと想定される「ソグド人商人・トルコ系遊牧民・漢民族の軍人と商人」という３種類のエスニックな存在をどう掛け合わせても、シリア系のネストリウス派キリスト教の流行と云う予測を導き出せなかったからである。

次に、ソグド期の南大門の外には、仏教僧院と推定される遺構が２つ立ち並んでいた。仏教僧院跡からは仏像が出土するので、火の灰しか出土しないゾロアスター教拝火神殿などよりは遥かに識別が容易である。寺院の立地条件から判断する限り、９世紀頃の砕葉城で、ネストリウス派キリスト教に次いで優遇されていた宗教が仏教であることは動かないと思われる。これは、ソグド人と漢民族の存在を考えれば納得できるが、問題を立てるとしたら、インド・アフガニスタン方面から伝播した仏教がそのまま定着したのか、それとも一旦中国内地へ伝播した中国仏教がシルクロードを逆流してセミレチエまで伝わったのかが課題になるかも知れない。因みに、道観は存在していなかった。漢民族の砕葉城支配が僅か40年に過ぎなかったので、建てる暇がなかったのであろうか。

更に、アク・ベシム遺跡で筆者が最も期待をかけていた「中央アジア唯一のマニ教寺院跡（旧ソ連の考古学者の表現）」と言われる地点に行ってみた。発掘報告書には、これがマニ教寺院であるとの証拠は記されていない。寧ろ、筆者が英語版を読んだ限りでは、「死体曝し台跡」の場所が特定されている。マニ教徒が死体曝し台を用いたという例は聞いたことが無く、大概それは、死体を犬やハゲタカに喰わせる為のゾロアスター教徒の葬送施設である。（尤も、マニ教の葬送儀礼については、全般的に良く分かっていないが。）仮に「死体曝し台跡」があったのならば、それは却ってゾロアスター教の葬送儀礼の場であることを裏付ける可能性が高いのではなかろうか。

・・そう思って、取りあえず自分の目で確かめるべく、地図に従って現地に足を運んだのだが、その地点はソグド期の城壁の西側に当たっていた。つまり、ネストリウス派キリスト教教会が城内の一等地にあり、仏教寺院が外城にあったのに比べると、立地条件は最悪で、この伝・マニ教寺院は城壁の外に建てられているのである。しかも、当の地点には、ただの大根畑が広がっていた（写真7参照）。ソ連時代にはまだ遺跡が保存されていたらしいのだが、キルギス独立後は、この国の研究機関は伝・マニ教遺跡などに構っている余裕がなかったらしい。こうなってしまっては、

写真７：アク･ベシム遺跡の伝･マニ教教会遺跡に広がる大根畑

何をどう検証してみようもなかった。今ここを掘っても、赤大根しか出てこないであろう。完全に個人的な推測になるのだが、城壁の外に主要宗教の寺院が建てられていたとは考え難く、且つ発掘報告書に「死体曝し台」と記載されているのが正しいとするならば、ここは単に、ソグド人ゾロアスター教徒の曝葬用施設の場に過ぎなかったのではないだろうか。

最後に、城壁の東北側にあるゾロアスター教の納骨器の出土地点に赴いた。この墓地がある以上、砕葉城に相当のゾロアスター教徒（おそらく、大部分がソグド人）が在住していたことは確かである。ただ、納骨器は沢山出土しているものの、骨自体は見付かっていないらしい。また、上記の筆者の個人的推測が正しいとすれば、6～9世紀のソグド人ゾロアスター教徒たちは、城壁の西側に曝葬用の死体曝し台を設置し、そこで得られた骨だけは城壁の東北側の墓地に葬ったことになる。別に死体曝し台と墓地が近接していなくてはならないと言う道理はないが、

紀元前6世紀のハカーマニシュ朝の皇帝墓などでは、両者は大抵近接している（ダフマの真上に、皇帝専用の死体曝し台がある）。それにも拘らず、アク・ベシムの城壁を山手線に例えるならば、新宿と上野くらいの角度で両者が分離している。これには、特別な説明が必要なような気がする。

ともかく、考古学という不慣れな方法論と、オアシス都市ならぬ草原の商業植民都市という研究対象に当惑しつつ、アク・ベシム遺跡こと大唐帝国安西鎮碎葉城を辞した。次回の『EURO-NARASIA Q』第15号には、クラスナヤ・レーチカ遺跡とイシク・アタ遺跡を扱う「**キルギス・セミレチエ（七河地方）におけるゾロアスター教・マニ教遺跡（後篇）**」を掲載して頂く予定である。

あおき・たけし｜1972（昭和47）年生まれ。東京大学文学部イスラム学科卒業後、同大学大学院人文社会系研究科アジア文化専攻博士課程修了、博士（文学）。日本学術振興会特別研究員、慶應義塾大学言語文化研究所兼任所員を経て、現在、静岡文化芸術大学・文化芸術研究センター教授。『ゾロアスター教史』（刀水書房）、『マニ教』（講談社選書メチエ）、『古代オリエントの宗教』（講談社現代新書）など著書多数。